

新 決済システム

C-CHECK

山田祥平

illust:Hasegawa Takako
Photo:Nakamura Tohru



の実力

「インターネット上のお店で欲しいもの見つけた！でもオンラインショッピングってなにかと不安だし面倒なんだよね」などと、オンラインショッピングの入り口でこの足を踏んでいる人はいないだろうか？ そんな人たちに教えたい新決済システム「C-CHECK」が、いよいよこの9月より始動した。その実力やいかに……。

プリペイド決済とその現状

どこにいても、パソコンと電話回線さえあれば自由に利用できるのがインターネットだ。そのインターネットを使った商取引は、24時間365日、欲しいときに欲しいものを買えるサービスを登場させた。

電子商取引について語られる際に必ずつき

まとうのが、決済に関する種々の問題だ。ウェブサイトというバーチャルな店舗しか持たない業者に対して、クレジットカード情報などを開示することへの不安や、クレジットカードを持たない、あるいは、持てない客層のサポート。数十円から数百円程度の決済など、解決すべき問題は山積みだ。

現状では、こうした問題に対する最も現実的な対策として、プリペイド決済が注目されている。既存のプロジェクトとしては、ビットキャッシュやウェブマネーが有名だ。あらか

じめ、ある程度の金額に相当する電子マネーとなるプリペイドカードを購入しておき、ショッピングの際の支払いに使う方法だ。しかし、プリペイドカードを購入できる場所や営業時間帯が限られているといった問題などが、年中無休24時間営業で閉店することのないインターネット上の店舗との矛盾を生み、この決済方法の浸透をさまたげている。目の前に欲しい商品があり、手元に現金もあるのに、買い物ができないというジレンマは、まだ当分の間、解決されることはないのだろうか。

一体どこが
違うのか?

C-CHECK 徹底検証

前述にもあるように、現状のプリペイド型決済システムは、カードを購入する場所や時間帯、あるいは保証問題など、解決すべき問題点は山ほどある。果たしてこのC-CHECKは、いままでほかのサービスが越えられなかったハードルをクリアできるのか？ その実力を徹底検証してみよう。

01234567



24時間いつでも支払い

業界初! 「収納代行システム」

9月からサービスを開始したC-CHECKは、株式会社デジタルチェックによるコンビニ収納型少額回収サービスだ。方式自体はプリペイド決済だが、1万5000店舗のコンビニで利用できる点や、電子マネーという商品を購入

するのではなく、コンビニで相当額の支払いをするという点が新しい。

現在コンビニでは、電話料金や電気ガス料金などの各種公共料金の支払いができるが、コンビニが電気やガスを買っているわけではな

い。C-CHECKの方式はここに注目し、販売店が電子マネーの在庫を持たなくても、見かけの上での購入を実現しているのだ。つまりコンビニは電子マネーの在庫を持たないにもかかわらず、それを売ることができるのだ。

ココで支払える!



ローソン



サークルK



ミニストップ



am/pm



サンクス



CoCoストア



セーブオン



ポプラ



スリーエフ



支払わなければ33の紙

C-CHECKの正体

C-CHECKは実際には商品ではない。だがコンビニに向いてその支払いを済ませた時点で、コンビニのPOSからC-CHECK決済センターにデータが送られて、通貨としての価値を持つ。代金が支払われると、C-CHECKカード(P.326参照)に記載されたID番号が有効になり、そのID番号を使ってインターネット上での買い物ができるようになるわけだ。つまり、代金未払い状態のC-CHECKはた

だの紙切れに過ぎないし、もちろんそこに記載されたID番号などなんの価値も持たない。これによってコンビニは、商品パンフレットのように無造作に、しかも代価なしでC-CHECKを店頭で配布できるし、雑誌などの大量に配布されるメディアに巻き込んだりすることもできるわけだ。さらにウェブサイトにて専用伝票を印刷できるページを作れば、それを印刷してコンビニに持ち込んで支払うよう

な使い方もできる。

ここで重要なのは収納代行というシステムを利用したことで、コンビニのPOSシステム構築や店員教育などに一切の負担がかからない点だ。これがサービス開始時に多くのコンビニチェーンが協力体制に入れた理由の1つでもある。





いくらでも買い足せる

「ID 継続システム」

当初用意されるC-CHECKは、3,000円のものや5,000円のものがある。すでに紹介したようにそれぞれのC-CHECKには個別にIDが振られ、コンビニで支払いをした時点でその金額が有効になる。各IDの残高はデジタルチェック社のコンピュータが管理するが、その残高に別のIDの残高を加算して1つのIDにまとめることができる。これによって、結果的に5,000円を超える高額C-CHECKを用意することもできるわけだ。

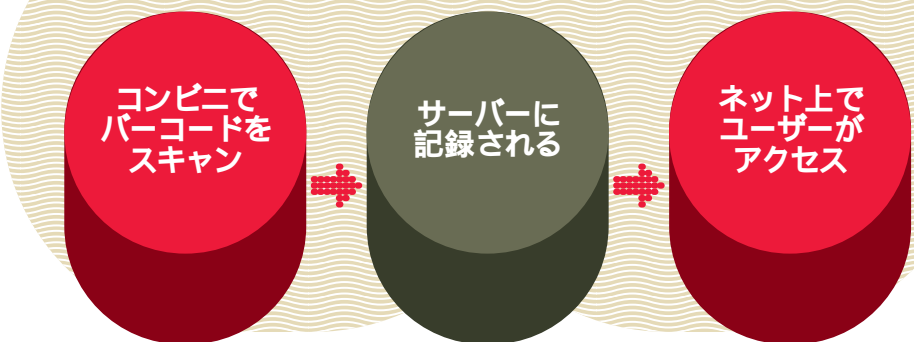
また、C-CHECKには支払った日から1年という有効期限があるが、これも残高を別のIDにまとめることで、新たな有効期限まで利用できるようになる。つまり使い続ける限りはプリペイドした金額が無駄になってしまうことはない。



仕組みがわからないと安心して使えない

「スキャンと同時にプリペイド」

C-CHECKの価値は、ID番号のみに対して発生する。コンビニでバーコードをスキャンした途端にIDが有効になったことがサーバーに記録され、残高の減算ができるようになる。ユーザーは対応ウェブサイトで購入物をしたときにこのIDを入力する。サイト側で入力されたIDはその場でデジタルチェック社に送られ、商品代金分の減算が行われる。その減算が成立した時点で、商品の購入が可能になる仕組みだ。



これで本当に安全便利と言い切れるのか？

「利便性の裏側」

C-CHECKには、認証という概念がない。つまりIDさえ知っていれば、誰にでも残高分の買い物ができる。意味を持つのはIDだけであり、それを印刷したカードが認証に利用されるわけではないからだ。

たとえば、企業のあるセクションで1つのIDを共有し、各スタッフが企画書や報告書作りに必要なデータコンテンツを購入するといった

使い方もできる。

だが、これを悪用するのは簡単だ。極端な話、喫茶店でノートパソコンを使ってC-CHECKのIDを入力しているところをのぞき見された場合、それは残高を盗まれたことを意味する。番号そのものがインターネットを流れる際にはhttpsなどが使われるが、パスワードなどとの組み合わせの仕組みがない以上、

IDの管理には十分な注意が必要だ。ただ、最高額が5,000円なので、青天井の損害を被る可能性がないのが救いだ。

また、そのIDの支払い主に関する情報が一切存在しないという匿名性は魅力だが、その匿名性が、いま述べたような問題を引き起こすケースもあるかもしれないので、各自がIDを厳重に管理しておく必要があるだろう。

一番便利でシェアが大きいのはクレジットカードです。それは間違いのないんです。どこにも行かなくていいんですから、面倒はありません。この現実が覆されることはないでしょう。

では、なぜ、われわれはC-CHECKを始めたのか？ ここで考えなければならないのは、少額の代金に関する回収をどうするかということだったんです。ある程度の金額が伴う物販はクレジットカードが一番いいんですが、逆に、カードを持たない層や持てない層がどのようにインターネットで買い物をするのかや、少額の決済をどうするかといった問題などが残っています。これらは、明らかに永久に残るんです。

インターネットの市場で起こす産業は、現状産業からの差し替えです。インターネットでなにかを買うというのは、特に新しい産業を創造しているわけではありません。たとえば、インターネットがあるおかげでクルマがたくさん売れるわけではないんです。

でも著作権ビジネスは違う。そこには含み益がたくさんあって、現金は顕在化していません。インターネットではその含み益を早く簡単に現金化できるんです。なぜなら、いままで売ろうとしても売ることがなかった細かいものを創造できるからです。そして、その多くは電話線を使って売ることができます。それらは果たしてクレジットカードで買うものなのかどうかということなんです。プリペイド方式にメリットのあるものが、明らかに残っていくはずなんです。

若い層がカードを持つまでは行動を起こせないというのでは、産業が育たないと思いませんか？ だからこそ、お金を確実に回収したことを保証する仕掛けが必要なんです。技術的には何も目新しいものはありません。C-CHECKはプロセスがユニークなんです。ネットビジネスで成功するには、セグメントされたなかで一等賞を取るしかありません。物

販で一等賞を取るの難しくて、特定分野でトップになることは可能です。いま、インターネットでの取引1,800億円のうち2割が電話線で買える商品です。この比率は今後ますます高くなっていくでしょう。なぜなら著作権ビジネスが拡大するからです。そういう意味でC-CHECKがその代金を払いにくい動機づけになればいいなと思っています。

現行のプリペイドカードが商品である以上、流通マージンの問題や小売店の在庫発生などいろいろな問題を抱えていますから、マージンを大きくしてそれらに対するコストにあてなければなりません。それでは普及は難しいのです。そこでC-CHECKは単純な仕掛けでこれらの問題をクリアしています。市場はまだ育っていません。いかにキラコンテツを持つかが課題ですね。もちろん、勝算はあります。

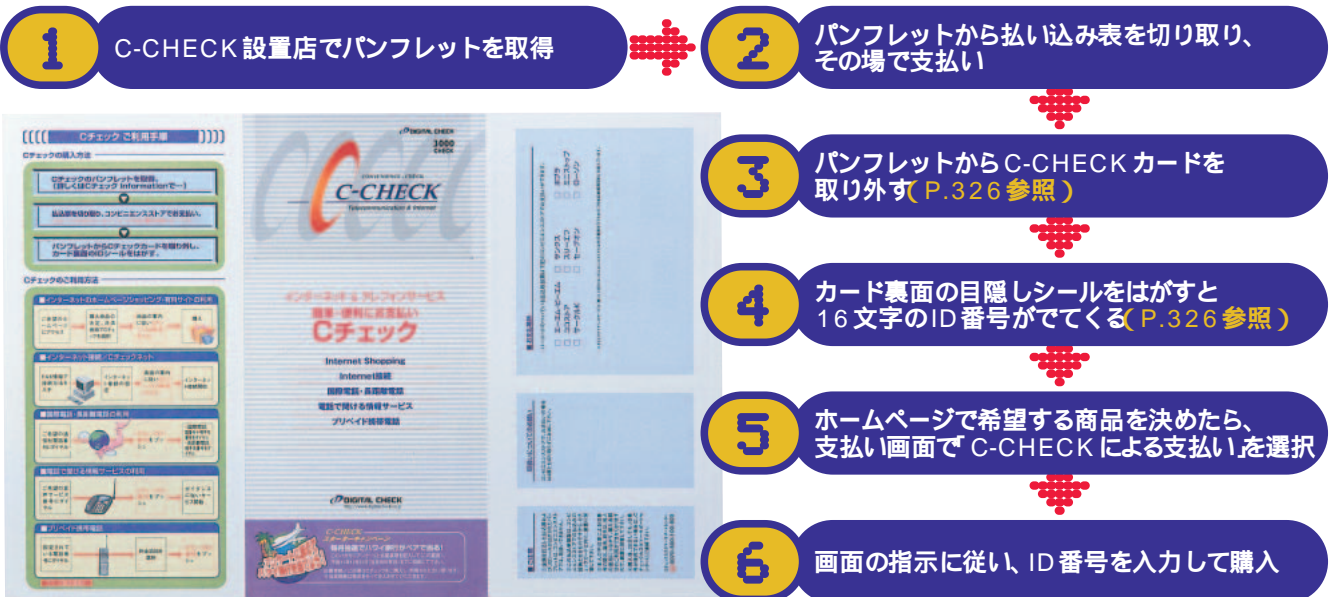


土岐隆之
株式会社デジタルチェック
代表取締役会長兼CEO

デジタルチェック 土岐隆之氏に聞く

技術ではなく プロセスにユニークさがある

ひと目でわかる購入までの流れ 「面倒な手続きはしたくない」




ところで
なにが
買えるの?

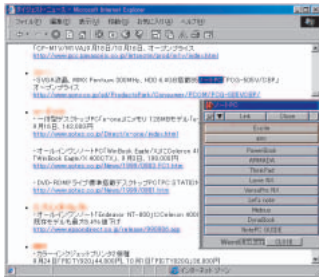
C-CHECKで支払えるおすすめコンテンツ

ここではC-CHECKを使って買えるおすすめコンテンツを紹介しよう。
どれもデジタルコンテンツならではの魅力あるものばかりだ。

01234567

ワードリンカー

 www.wordlinker.co.jp



画面上の言葉をなぞるだけでインターネットコンテンツへ発でリンクできるスーパーソフトウェアが登場。これを使えば、使用しているアプリケーションに関係なく、どこからでも情報を引き出すことができる。言葉の意味や関連する情報をその場ですぐにキャッチできるこの優れたソフトの有料コンテンツ配信の代金決済業務を11月よりC-CHECKが行う。

ニクナックONLINE

 www.niknak.ne.jp



テスト範囲にピッタリの「中学生のための中間・期末テスト予想問題自動販売機」を9月下旬より開設。学研の「Vメイト」定期試験問題データベースを利用した予想問題をメールで配信している。いまならオープニング記念サービスプライスとして1回100円で購入できる。

まんがの国

 manga.accessticket.com



「週刊サンデー」「週刊少年マガジン」ほか多数の人気漫画の最新号とバックナンバーをオンライン上で購入できる。購入後はダウンロードしてその場ですぐ読めるというマンガファンにはたまらないサイト。専用のCD-ROMが必要なので、詳細はホームページでチェックしてほしい。

よしもとシーオージービー

 www.yoshimoto.co.jp



ホームページ内にある「よしもとネットショッピング」では、本人がしゃべる「よしもとギャグキーホルダー」やボケとツッコミを集めた「よしもとPC警告音」、「よしもと芸人アイコン」や「よしもとスクリーンセーバー」など、よしもとならではののしいグッズが勢揃いしている。

music.co.jp

 www.music.co.jp



音楽系コンテンツの配信サービスで有名なmusic.co.jpが提供するいま押しサービスは、MP3ファイルのダウンロードサービスだ。契約楽曲はなんと5000曲以上もあるが、アーティスト別検索とレーベル別検索ができるので、非常に探しやすい。また、購入する前に視聴もできる。

ショッピング
だけじゃ
ない

まだまだ使える C-CHECK

01234567

実は、C-CHECKを使ってショッピング以外の決済もできる。さらにこの10月からi-CHECKなる姉妹サービスまで登場する。ここではC-CHECKが使えるさまざまなサービスを一気に紹介しよう。

C-CHECKのシステムは、ウェブサイトでコンテンツを購入するだけでなく、国内、国際電話サービスやインターネット接続サービスプロバイダーへの支払いなどにも利用できることを前提に作られている。インターネットという世界に閉じこもることなく、さまざまな種類のサービスを購入できるようになれば、その普及には拍車がかかるに違いない。

つまり、形のないものをコンビニで購入する際の定番となることができれば、このビジネスは大きな成功を収めるだろう。そのためには、一にも二にもキラコンコンテンツの充実が求められる。

この秋からは、クレジットカードを使っても買えるようになるというC-CHECK。買うのではなく支払う。それ自体が金券商品ではないからこそできる離れ技だ。

“C-CHECKの姉妹サービス”
『i-CHECK』が10月1日よりサービス開始!

業界初! ドコモのiモード対応 インターネット有料コンテンツ 代金決済サービス

このサービスはC-CHECKのiモード版と考えていいだろう。100万台突破が発表され話題沸騰のiモードだが、現在あるインターネットサイトの大多数は非公式サイトで有料課金をしていない。i-CHECKではC-CHECKと同様のサービスをiモード対応インターネットサイトの有料コンテンツ配信会社に適応させ、専用のプリペイドカード「i-CHECK」を発売。これで有料コンテンツが一気に普及するかもしれない。



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp